

「底が突き抜けた」時代の歩き方 568

1960年代末の日常的な光景－胎動としての大学祭変革団の役割

かつて村尾は自分と同様に、大学でやるべきことが見つからずに漂流していた同じ所属大学の友人と連れ立って、〈 〉大学で開催された深夜の大学祭に同じ大学の催しとは思われない狂躁のお祭りに踏み入ったことがあった。1966年1月25日付の〈 〉大新聞には、その大学祭に関する次の記事が掲載されている。

《徹夜論議で期待された第17回大学祭は、18日前夜祭を皮切りに19日（土）から5日間、23日（水）まで杉本町学舎を中心に開かれた。

注目の大学祭変革団企画” 暗夜の対話劇 《は、予測された実力行使はなかったが、中執の客留め（？）にあい予定より二時間ほど遅れて開催された。大和屋竺監督「裏切りの季節」で幕を開けた” 暗夜の対話劇 ― 頽廃者への鎮魂 《は、19日午前零時頃よりいよいよ本番に入り。ハプニングでは詩人支路遺耕治氏と観客との間で活発なやりとり。つづいて監督の足立正生氏を迎えて「鎖陰」が上映。上映後足立氏は「フィルムを提供することでというので、私は自分のやりたいと思っていることをやった。当時人に観せるということは念頭になかった」と簡単な製作のあいさつを行った。午前8時すぎ「沈黙」のラスト・シーンとともに、同企画の全プログラムを終了した。

実行委、体育会などから不健全な企画として中止勧告がでていたが、演出の拙さが目立ったものの、混乱もなく「真面目すぎて期待はずれであったが、まあ面白かった」というのが、観客の素直な意見であった。

これにさきだって前夜祭が、18日（金）午後5時から教養キャンパスで開かれた。年々派手になるいっぽうの前夜祭だが、今年は模擬店が50数軒もでるという高度成長ぶり。ビヤパーティはエレキ演奏にモンキーダンスが溢れていた。また、洋酒喫茶も登場するなど、例年以上の派手さであった。しかし「一年歳をとったせいか、今年のモンキーダンスには何か素直についていけない」という声も聞かれるなど、翌19日からいよいよ本番。しかし例年のことながら閑散としており、大学祭が曲り角に来ていることをしみじみと感じさせた。》

この記事にあるように、村尾ら二人は大学祭の前夜祭に徹夜で参加していたのであり、詩人と観客との喧嘩腰の、お互いに挑発しあう激しい言葉の応酬や、訳のわからない映画よりも、村尾にとって最も印象的でいまでも鮮明に記憶に残っているのは、たぶん前夜祭も終盤に差し掛かって空も白んできた頃だったと思われるが、進行係の学生が紹介すると、” マロ！ マロ！ 《の合唱が始まって登場した田宮高鷹のアジテーションだった。騒音の中での演説であったため、聞き取りにくくよくわからなかったが、その名調子に

聞き惚れたのがいまもありありと思い出される。壇上で威勢よく声を張り上げている男が大きく見えるほど、村尾の目にその熱弁は格好良く映った。その一年後、成田の三里塚闘争で出会うことがあったが、彼は意外に小柄であった。このアジテーションから三年半後に田宮は「よど号」ハイジャックの日本赤軍リーダーとして北朝鮮へ飛び、我々の視界から永久に姿を消すが、彼のその夜の演説は村尾を学生運動に傾斜させていくのに積極的な役割を果たしたのである。

この前夜祭は大学当局を刺激したらしく、やがて主催者であった「大学祭変革団」の学生は退学処分になったことを後に知るが、二年後に全世界的な規模で噴出した〈大学闘争〉の先駆けであり、前兆ないし胎動として位置づける必要があるように思われる。この「変革団事件」については、先の〈 〉大新聞同号には、次のような経過が記されている。

《ここ半月間、実行委と変革団の間で論争があった。徹底企画のそれをめぐってだが、その内容についてではなく実行委の行政的処置の是非が中軸になっていた。それゆえに文化的にはほとんど何も得られなかったのは、変革団にとって不本意なことであつたらう。

まず事実の経過を追ってみると10月22日、変革団（当時グループ総称として名づけておらず、新聞会、現代詩会、社会思想研究会、現代思想研究以上四者）で徹夜企画を申込む。11月3日、内容上、及び金銭問題で新聞会が脱退する。この間実行委は徹夜ティーチ・インを大学祭企画の一つとして宣伝ビラ発行。11月4日実行委は変革団に徹夜企画を大学祭として認めないと通告。（但し実行委内部で討議されていない）

理由が不明確であるとし再度、5日に通告。13日、中執は実行委決議を支持する旨の決議（田宮中執はこの間の中執開催を知らされずにいる）体育会、徹夜企画は大学生として好ましくないとの理由で中止勧告決議（内容について変革団に事情聴取せず、^{（マ）}プロイントが反対したのみ）

以上があらましの経過であるが実行委の一方的処置であることは明らかである。実行委は決議理由として「①徹夜でやること、覚醒剤を使用すること（変革団はコーヒの文学的比喩であると説明し、誤解を解くため撤回した）から不健全である。②徹夜の企画まで警備の責をまっとうできない、③翌日の企画に悪影響する」と11日付アピールで声明している。だが第二点については10月22日の時点で明らかなことであり、理由にならない。

また第一点については事情聴取をやっておらず実行委の一方的主観でしかない。第三点は、実行委の文化にたいする無知（後述）を明らかにした暴論であるゆえ、全体として決議は有効性をもたない。むしろ実行委の独善的、官僚的処置といえる。

ところで一番問題にすべきことは実行委の決議理由の第三点

実行委はより多くの企画を、できるだけ多くの場所で全体として有機的に実現したいと考えている。しかし、前夜の企画のために翌日のサークルの企画への参加が少な

くなり、全体としての大学祭のプログラムに支障をきたす場合は、その企画に対して時間的制限を加えることができる（後段省略）〈大学祭アピール、11月11日〉

ここにあるのは文化享受者に対する冒瀆しかなく、自身の文化無知である。確かに徹夜企画の参加者は翌日のプログラムには参加しないだろう。しかしそれは彼の選択意志によるものなのだ。二つの企画を天秤にかけてどちらをとるかは個人的問題である。映画と講演が同時にあるということはざらにあるのだ。この選択の基準は、どちらに自身の投影を見いだすかということである。少なくとも翌日の参加者が減少すれば、その企画に享受者が自己の投影を見い出さなかったからであり、企画が悪かったことの証左であり、表現者の敗北ということである。

少なくとも、ここ数年大学祭における表現者が、参加者の少ないことを、自身の表現の拙さ、敗北と意識したことがあったろうか。それだけの気概があれば、このような実行委の存在は許されなかったであろう。大学祭全体のイメージをつかめぬまま、前夜祭の個人プレーはやめようなどとほざいていた彼らは、見事前夜祭において敗北していった。よりいけないことには、今年のそれは常軌（実行委、体育会流に言えば大学生らしからぬ）を逸している行為が見られたことを、実行委、体育会（とくにワンゲル事件と合せ）は謙虚に反省しなければなるまい。》

この記事から、記憶の点で曖昧だったいくつかの不明な点が浮かび上ってくる。村尾らの参加した〈 〉大の大学祭前夜祭は、1966（昭和41）年11月18日夜から翌19日朝にかけての開催であったこと。学外参加者にはわからなかったが、前夜祭の騒然とした活況ぶりは学内参加者の積極的な支持によるものだけではなく、学内の反对者をも巻き込んで強引に行われたことの意気込みに裏打ちされていたこと。徹夜企画の主催者は「変革団」を名乗るグループであり、彼らの試みは大学祭の変革のみならず、大学そのものの変革の射程をも含んでいたことが、その二、三年後に全世界規模で起こった大学闘争によって明らかになったこと、などである。田宮高麿のアジテーションも学生自治会の中執としての立場からのものであったことや、彼の演説が「変革団」主催の企画の反対勢力を批判する内容であったために、学内参加者からのやんやの喝采を受けたであろうことも読めてくる。

同新聞の「論説」は、「変革団事件」が提出してみせた問題に対して、《第17回大学祭は、変革団と実行委＝中執、さらには学校側が加わって一大絵巻をくり広げ、今までにない論争を呼びながらも、いざ本番になれば、しりすごみの内に終わった。これに反して前夜祭での模擬店、ビアパーティなどの催しは昨年に増して大衆的参加を見せ、移り行く大学祭のイメージを、くっきりと浮かび上がらせたといえよう。そこでこの“祭”現象にどう対応していくのか、今後の大学祭への視点を出したい》として、大学の中の〈祭〉の可能性の問題に切り込んでいる。

《（一）われわれは昨年の大学祭総括の中で次のように述べた。《文化の大衆社会化現象は学生の意識を分散させた。大学祭がこれに対処する道は二つしかない。すなわち大学

祭に”祭”以外のものを求めず、参観者を多く集めることを第一とするか、文化の大衆社会化現象を拒絶しようとするサークル運動の”場”ということを第一義とするかである》まさしく一年たった今、この現象を鋭く呈してきたといえよう。しかも、大学祭が”祭”としての存在価値しか持たなくなってきた、という点で。

このような状況はここ二・三年、本学のみならず全国的に起こっている現象である。最初は、学生大衆の大学祭不参加→テーマ・企画の改革→学生大衆の大学祭参加、という円環の中で解決しえんと考えていた。テーマ論争が全国各地で起ったのはこのときである。しかし、それとは無関係にこの過程で前夜祭、あるいは仮装行列への参加は年々増加し、それと反比例して本番への参加が減少してきた。しかも、この間テーマに関する論争が、政治的か文化的（非政治的）か、という進行しつつある状況とは無関係な次元で続けられた。大学祭に参加する学生大衆の意識構造へと下降する作業が放棄されてきたのである。

（二）よくいわれる”学生の大衆社会化状況の進展”それ故に学生大衆に現実の反動化をめざめさせねばならないということで、問題はかたづけられない。大衆社会化状況自体が、否定せられるべきものであるかどうか、あるいはその中の学生は啓蒙せられるべき存在かどうか、疑問である。行きつくところ学生の意識にくい込むことはできず、文化・政治表現者と学生大衆との乖離を固定化することになるのではないだろうか。

民学同はこれに加えて、一般的には正しい”統一”を絶対的なものとし、そこから全ての問題をたててくるという誤りを行なってきた。なぜ統一できないか、先に述べた学生の意識構造に対する無理解、つまり現実の状況論を抜かしてきたのだ。今回の変革団に対する見解は、文化の官僚的押さえ付けというほかに、このことの表われでもあった。

一方、この状況自身に乗っかかったものとして民青系の”皆の参加できる大学祭に”という方向が出てきた。中味は歌とダンスとスポーツ、それに加えて皆の要求を持ちよる集会である。前夜祭に参加する学生が単に”祭”に参加したい、という意識としてしか見ない学生大衆をバカにしたものである。しかも、民青系なりの自己表現をする場合、同盟員しか組織できない。

（三）問題は、ここ三、四年の間に”平和と民主主義”の統一理念が有効性を持たなくなった、という過程における、文化（政治）表現者の間での利害対立あるいは表現者と大衆との利害対立を止揚できていない状況にある。大学祭が”祭”としてしか存在できないのはこの状況の反映でもある。

すなわち、上下部構造の再編成からさらには既存の全価値体系の崩壊の過程に表出した、私的な利害対立を包括しえない過渡期である。ただ、運動が起こるとするならばこれまでの高度成長に乗ってかかり、小市民層の上昇意識のみに立脚し、各個人の生活と無関係に運動を推進しえてきたという擬制のものと違って、学生大衆の生活までくい込み、その意識構造を自己思想化し、表現するものとして永続化しよう。

したがって、今、大学祭をどうするかという形で問題は解決できない、ということは

認識せねばなるまい。すぐれて、情況論に対する困難な思想作業が要請されているのであり、それ自身が出発点にあたるものであり、すぐさま体系的な理念として完成するもの、と考えることは拒否したい。たとえ、闇夜の苦闘に終ろうとも、そう考えたい。われわれはこれが、大学祭が過渡期の”祭”現象を止揚しえる契機となると考える。》

大学祭実行委員会が本番として力を入れた大学祭そのものは一向に盛り上がり、それとは反対に前夜祭は活況を呈したという、そのことが提起している問題にこの「論説」は切り込もうとしている。外部参加者であった一般学生大衆の一人である村尾が前夜祭に参加したのは、テーマはともかく、企画が面白そうに感じられたからである。受験勉強から解放されて大学に入ったにもかかわらず、大学の講義は無味乾燥^{あくび}で欠けに包まれており、〈面白さ〉を求めて入部したラグビー生活も、連日ボールを持って走ってばかりいるだけの、過度の身体的疲労によって退屈からは遠ざけられるけれども、考えることから遠ざけられる単調な生活のリズムにはかならなかった。もはや小遣いとはいえない額のお金が飛び交う麻雀は、なるほどゲームとしては一喜一憂できるバクチ的な面白さはあったが、所詮遊びであり、命を賭けるに値する遊びではなかった。

〈面白さ〉に飢えていた村尾が学生運動にかかわっている A にひかれたのも、彼が「社会に役立つ」ことをやっているからでもなければ、真面目に社会のことを考えながら生きているように映ったからでもなく、面白いことをやっているようにみえたからである。同じ大学生でありながら、彼は面白いことをやっているのに、自分には面白いことがないという不満が爆発しつつあったのだ。したがって、村尾が前夜祭に参加したのも、〈面白さ〉に出会えるのではないかと期待したからである。前夜祭でなにが行われるかは全くわからなかったけれども、なにかワクワクできることに出会えそうな気がしたのだ。実際、前夜祭に参加して失望はしなかった。それどころか、場のいかがわしさと不穏さと、混沌と出鱈目は村尾の心を驚嘆みにしたのである。

「論説」は、《大学祭が”祭”としての存在価値しか持たなくなってきた》ことを見抜いているが、本番への参加者が年々減少していきつつあったのは、本番がもはや《”祭”としての存在価値》を持たなくなってきたことからすれば、あまりにも当然のことであつた。一般学生は”祭”としての大学祭に参加することを願っていたのであって、大学祭という名前のついた退屈な日常生活に繋ぎ止められることを願っているわけではなかった。つまり、〈面白さ〉を求めて日常生活からの脱出をたえず図ろうと願っていたのである。だから本番には目もくれずに、本番から大きく逸脱していくようにみえる前夜祭に目を向けようとしたのだ。本来、《大学祭が”祭”としての存在価値》を持ちつづけていたなら、前夜祭などは無用であつた。にもかかわらず、前夜祭が挙行され、注目されはじめたということは、《”祭”としての存在価値》が本番から前夜祭に移行しつつあることを物語っていたのだ。

では本当に、前夜祭は本番から逸脱しつづけ、その度合いだけ、《”祭”としての存在価値》を持ちはじめていたのだろうか。そもそも”祭”とは一体、なにか。おそらく

「大学祭変革団」はもはや《”祭”としての存在価値》を持たなくなった大学祭の変革を通じて、”祭”を追求していく主体として登場しつつあったのであろう。”祭”が日常生活からの逸脱による〈面白さ〉、見知らぬ出来事（イベント）に対するワクワク感によって支えられるものであるのはいうまでもない。「変革団」は前夜祭の暗夜にふさわしく、白昼の本番ではほとんど不可能とされる自主上映的なキワモノ（本当はそうではないが）映画の上映や、”疾走する”気鋭の若手現代詩人の登場などの企画によって、人間世界の裏面にうごめくあやしげでいかがわしい実相に参加者を対面させ、そこに変革の契機を見出そうとしていたのかもしれない。「変革団」の意図が個々の参加者にどこまで伝わったかはわからなかったが、村尾はここには面白いことが確かにあるということを実感したことをいつまでも忘れずにいた。

40年後のいま、振り返ってみると、あのときに感じた〈面白さ〉は単に企画の〈面白さ〉だけでなく、それ以上に村尾も含めて参加者のつまらなくて単調な日常生活の〈いま・ここ〉以外のどこかへ踏み出したいと願う息づかいの熱さにあったと思う。別に懂れて大学に入ったわけではないが、受験勉強のクソ面白くもない長いトンネルを抜けると、そこはもっとクソ面白くない、白けた荒廃地だったとなると、「こんな筈じゃなかった!」、こんなところにやって来るために長いトンネルを我慢して潜り抜けてきたわけではなかった、という思いが心の底にくすぶりつづけるのは当然であった。「変革団」の思いも同じであったにちがいない。去勢されたような大学祭に爆弾を一発投げ込んで、まずは自分自身と周囲との関係を変えなければ、我々はどこにも赴けないじゃないか、という雄叫びをあげようとしていたのだと思われる。

この「変革団」の雄叫びが前夜祭の企画を通して、学生たちの鬱屈した心に伝染していったのだろう。とりあえず、思いの丈を吐き出す場を確保しようじゃないか、という声であった。「変革団」も参加した我々もどこまで意識していたかはわからないが、〈占拠〉の感覚を共有していたと思う。単なる羽を伸ばせる物理的な空間である以上に、精神の非合法空間であろうとしたところが、「変革団」にとっても一般学生にとっても、〈面白さ〉の尽きぬ根源であったのかもしれない。

前夜祭に参加した内外の多くの学生は企画が終了する明け方には去って行き、そして不評の本番も消化されて大学祭の季節は例年通りに過ぎ去っていく筈であったが、”祭”は終わっても、”祭”をめぐる遺恨が終了後に変革団と実行委＝中執、大学当局の間では続いていたのであろう、この問題は「変革団」の責任者二人に対する退学処分のかたちをとって幕が引かれようとしていた。〈 〉大新聞（67年3月25日号）には、”祭”後の変革団に対する処分も含めて、「変革団」事件が提出した問題を「変革団メモランダム」（**白昼の頽廃から暗夜の自立へ そしてたそがれの暗殺へ**）と題して、編集部が次のようにまとめている。

《大学祭変革団は、昨秋、マンネリ化した大学祭に批判的心情をもった学生たちが、これまでの大学祭に対し、新たな大学祭を創造しようとして結成された。

問題になったのは、彼らが実行したさまざまな企画の中の暗夜の対話劇” 頽廃者への鎮魂” というプログラムで、その企画は” 〈 〉 大学生および大学祭の矮小化され創造性の欠如した貧弱な感性を揺り動かし、もって、大学祭・前夜祭における不毛性を払拭するための痛棒を加える” とあった。これが退学の理由となった前夜祭の徹夜ティーチ・インで、張間隆蔵君は” 頽廃者への鎮魂” 実行委員長で、安西清尚君は変革団団長だった。

このティーチ・インの講堂使用が大学当局から不許可となり、体育会、自治会、当局の反対する中を張間君らは強行したもの。

変革団は、大学祭の十ヵ月以上も前から構想がねられ、当初は、激しい自治会中執＝民学同批判としてあらわれた。当時、「迫り来る大学危機への過程で、現代日本とは何か／学生生活とは何か」と大学祭実行委からテーマが出された時、これを無内容、無責任ときめつけ、各クラスで「民学同流の危機感のおしつけで、このような政治家たちをのさばらしていることこそ危機なのだ」と情宣活動を展開、変革団は、自ら「白昼の頽廃から暗夜の自立へ」とテーマを設定、吉本隆明講演会や、前夜祭ティーチ・インなど、種々のプログラムを企画実行、吉本講演会では四百人も学生の集まる盛会となったりした。

大学祭実行委の活動がめだたないものであり、クラス討論にもちこんだりは全然しなかったため、特に彼らの活動は注目を集め、一般には「白昼の頽廃から暗夜の自立へ」が大学祭テーマと思われる程だった。

変革団と実行委の思想的対立は実行委が、変革団の徹夜ティーチ・イン企画を「不健康」として大学祭参加を認めなかったことから政治的対立に変わっていった。

「大学祭は全員が自由に参加できるもので、実行委は学生の企画を実現させるもの、禁止する権限はない」とした変革団は” 頽廃者への鎮魂” 実行委を結成して、独自で学校当局と交渉、許可がおりなかったが、張間君を責任者に強行開催を決定、団員一人をハンストに突入させた。

これに対し体育会は翼下のほとんどのサークル連名で中止勧告を出したのをはじめ、実行委、自治会中執と文化サークルに圧倒的な力をもっている民学同が強力に反対、企画の中の映画「裏切りの季節」「沈黙」等を取りあげ「酔っぱらった学生にエロ映画を見せて野獣的徹夜パーティをやろうとしている」といやらしい程の攻撃を加え、当日はこの企画を失敗させるよう参加しようとする学生に約50名程で説得ピケをはった。

このため一時開催不能かとも思われたが、11時頃には約四百人程が学内外から集まって予定通りの強行開催となった。

ティーチ・インは、映画、アジテーション・ジャズ演奏、講演等が行なわれ、結局約二百人の参加の下で翌朝七時過ぎまで続けられた。学校当局は学生部委員がこれに付き添い再三中止を勧告していた。そして二ヵ月後、当局は安西君、張間君二人に退学処分を決定した。

今退学に至る変革団事件を辿る時、この問題に学校の処分を学生が許したこと、自治会が大学祭という学生の問題を処理しきれなかったこと、変革団自身が民学同批判から彼らとの政治的対決への道を選び、文化表現者となりえなかったことの問題から、彼らを動かした原因である〈 〉大文化の不毛性の問題までの真の解決を考えねばならないだろう。

学生内部の政治的解決については大衆的討論から代議員会での決定の道がある。現中執が代議員会をついに成立させえなかったこと、大学祭実行委が、変革団が挑戦したとはいえ、政治的に弾圧にかかったことは今回の最大の問題としてある。

しかし、変革団がぶつかっていった真の問題であった〈 〉大文化の不毛性に彼らもまた何ら一撃を加えることのできなかったこと、この不毛性の重さをみのがしてはならない。今中執がこの問題を隠蔽しようとしていることは、まさに「たそがれの暗殺」という外はない。》

この同じ新聞の第一面には、「元大学祭変革団」の肩書きで張間隆蔵が「無声慟哭の葬列と退学」の一文を寄稿しており、そこには彼に対する次の退学処分書も掲載されている。

文学部学生 張間 隆蔵

〈 〉大学学則第22条により懲戒処分として退学にする。

昭和42年1月31日

〈 〉大学長 渡瀬 譲

理由

同人は、本学昭和41年度大学祭に際し、「大学祭変革団」を組織して、その中心となり大学の再三にわたる企画の中止もしくは変更の勧告にもかかわらず講堂を不法に占拠して大学内外の者を集め、大学の解散要求にも応ぜず、11月18日の深更より翌19日の朝に到る間、あえて集会を強行した。

これは、大学の秩序を著しく乱した極めて遺憾な行為であるのみならず同人は、現在においても、大学の禁止をあえて犯したことにいささかの改しゅんの情をも示さず、今後再びこの種の事件をひきおこす可能性があると判断される。

寄稿文の冒頭で、《もともと、大学祭という文化的世界を軸にしたひとつの行事に対し、その今日的形態と内実に向かって一撃を加えようとしたはずのある種の文化集団が大学当局の行政処分を誘発してのち行方不明のごとき様相を呈しながら立ち去ったことがひとつの政治的事件として表面化するなどということは、どうみても有利なのだとは断定する以外ない。いいかえれば、登場したすべての喜劇役者の背中にはこの愚かしい二文字のレッテルを貼りつけてもかまわないのだ、ということである》とシニカルに書きつけた張間隆蔵は、自らに対する退学処分を断行した大学当局や、文化的～政治的に対

立した大学祭実行委員会に対してよりも、自らが所属した《「変革団」の弱点に充ちた背理性、非合理性》により多くの内省的な批判を向ける。《自己のプログラムを遂行すべく政治的無頼の徒と化し、大学当局の行政処分に対しほとんど無抵抗を呈した無頼派》にすぎなかった「変革団」に対して。

彼は《「変革団」のプログラムの不備、そして思想的不備へと移動してゆく糸口》を象徴しているようにみえる、当日のエピソードを紹介する。《昨年秋の11月18日、前夜祭当日であり、「変革団」のプログラム” 頽廃者への鎮魂”と銘打った文化集会が開催された(……)その夜、強行突破を企てる「変革団」と、妨害阻止活動の群を成したパリサイびと達とが専門学舎の門前でこぜり合いを演じ》る一方で、他方で映画のフィルムの受け取りミスによって、《「変革団」は文化集会の会場に参列した文化大衆に対し、しどろもどろの対話を始める部分と門前で雀達と戯れるふたつの部分に分断され、焦慮の空転を演じ》るという、《「変革団」のうろたえぶり》が目撃されるなか、彼は映画フィルムを積載した自動車を必死に捜しまわりながら、《” 何故だ、何故わたしはこんなことをしなければならないのだ”と哀しみに充ちた自問を繰り返していた》。

「変革団」が前夜祭においてやったことはなにか。

《「変革団」の企てた行為はそのプログラムに表現される。しかし文化集会の内容は要するに映画上映ということだけに収斂してしまったと思う。映画を見にくるというひとびとが大半だったので格好がついたのかも知れない。あるいは、「変革団」の強行した決意に慰めをかけたひとびとが大半だったのかも知れない。いずれにしてもプログラムは全て遂行されず” 暗夜の対話劇”と銘うったはずだというのが色濃い印象であった。要するに、表現者の位相から啓蒙者の位相に転落したのであり、映画興行主のところへまで降りていったのである。》

このことを見据えるためには、「変革団」の結成を通じて前夜祭でなにをやろうとしていたのかを振り返る必要がある。彼らにはこれまでの前夜祭が次のように映っていた。

《ひとつは、従来のような静かな酒飲の集いのような前夜祭が、熱狂的な踊り子たちの登場といわれる夜店方式の飯店の群れの登場である。このような風景を描いて行くためのひとつの記憶は例年になく淋しい雰囲気を漂わせていたということである。すこしも、連帯感というか、同族意識というか、そのようなものが感じられなかったということである。拡散されたひとびとの意識の流れが内的に凝集され、再び外発されて行くといった過程ではなく、そのまま拡散されたままひとびとが群れを形成しているという感じであった。

変革団はこのような風象をエネルギーの凝集された有りさまと見なしたのである。そして、これを” アナーキーな噴出”^(ママ)というイメージで表現したのであった。変革団の立脚した前夜祭での一見不合理ともいえる学生大衆の群狼ぶりを論じる背後には、前夜祭以降の言わば従来大学祭の本番とされている諸サークルの展示、講演会、ETC の衰退ぶりが指摘されていたと思う。》

これまでの前夜祭から《” アナーキーな噴出 》とでもいうべき、《学生大衆のエネルギー》は感じ取れたものの、そこには連帯感や同族意識のようなものは全く感じられなかったために、もはや既成のイデオロギーでは包み込むことのできない《前夜祭に凝集された乱脈する学生大衆のエネルギー》をおそらく組織化する一步にむかって、「変革団」として登場しようとしたと思われてくる。もちろん、イデオロギーによる組織化ではなく、学生たちの不定形なエネルギーの噴出に見合った意識的な集団として登場することを意図したのだろう。時に” 新たな共同性の地平を 》といったスローガン^(ママ)を掠め去ることがあったかもしれないが、「変革団」と名乗ったとき、彼らはなによりもまず自分自身の変革の途を踏み進めなくてはなくなるのは不可避であった。

《「まずは／ぼくらの手による／ぼくらの暗殺から始めよう／そこから／何かが始まるのではないだろうか／これはぼくらのふたしかな仮説である」》と変革団は祈るように降魔の道へ入ったのだと思う。すでにここにおいて、変革団は変音の拠点たる前夜祭の熱魂の全貌を包括することは先験的に不可能であったのだが、つまり、少くとも表現者の位相にしかるべき拠点を築くことはできず、自己の変革プログラムは先述した通りちぐはぐなものであることを余儀なくされたのだが、その不合理ともいえる決意の情念において一步、前夜祭の熱魂に近づき得たのではなかったろうか。》

しかしながら、《” アナーキーな噴出 》というイメージで表現》される、学生たちの《エネルギーの凝集された有りさま》は、《拡散されたままひとびとが群れを形成しているという感じであった》から、その学生たちの熱ある不定形な塊に依拠しようとした「変革団」も当然ながら、学生たちの拡散した意識をそのままかかえこまざるをえなかった。その弱点は中心メンバーに対する退学処分が断行されたときに、顕著に浮き彫りにされた。

《ここで、わたしは変革団事件の終章を飾った大学当局に対し、何故、変革団が黙認したのかを明らかにしてゆく素描が導入されなければならないと思う。無頼の徒が役人共にけんかを吹っかけ、急速に黙ってしまったことの間には無頼の徒がある風象に口をすぼめざるを得ない恐ろしさを、感じたのではなかったろうか。

(中略) 変革団の決意の情念が一見不合理であったように、前夜祭の学生大衆の熱魂もまた、非合理的な様相を呈していた。変革団の不合理性と前夜祭大衆の非合理性を結ぶ糸とは何なのであろうか。このことをすくいあげねば、変革団は何の取柄もないただの無頼の徒であったと思う。

あるいは、映画で金をもうけようとした単なる悪戯っ子だったと思う。変革団の視察したものは戦後民主体制の背後に貼りついた支配理念を信奉した神学の徒党たちの葬列風景だけではなかったはずである。まさしく、変革団は戦後民主主義体制の底で黙々と傷つき、悲しみ、嘆き、わめきながらその生を歩いてきた戦後大衆が頑強に培ってきた土俗的な夜店、” まつり 》などの行事が脈々と生き残り、変革団の目前で亡霊の呪いのようにうめき声をあげている風景ではなかったか。(中略)

戦後大衆の意識の流動の間接的投影としてもう一度、前夜祭を見据え直す地点へその決意の情念によって移動しようとした時、すでに時は去っていたと感じた時、果たして変革団は抜けた顔をしたまま大学当局の処分などという小さな問題にかかずらわっていたであろうか。そのようなスマートな二元論的行為に易々と乗じるだけの無頼派なら、恐らく集会を強行することすらできなかったのだと思う。変革団は思想としての定型的な市民的急進主義からの離脱をかけて自己の卑屈なプログラムをあえて強行した。その時、下方に黒々とした戦後大衆の呪いに充ちた静かな無声慟哭を奏でる葬列を視象したのだと思う。恐らく放たれた言葉でなら解釈可能であるのかも知れないが、身に受けた傷で感知しなければ本当は理解できないところに例えば”変革”という言葉の軽々しさと重たさの重複合体を解析する困難さがあるのだと思う。》

今から振り返ればこの記述には、変革団が大学当局から退学処分を引きだしたという発想もみられないし、前夜祭に続く本番の〈祭〉を退学処分を契機にして拡大し、深化せしめていくという構想もみられない。《変革団は抜けた顔をしたまま大学当局の処分などという小さな問題にかかずらわっていたであろうか》という思いは、前夜祭を強行した変革団の役割をもすでに終えたものとしてみていたのだ。変革団にとっての真に戦わなくてはならない舞台はもはや大学祭（大学）ではなく、《戦後民主主義体制の底で黙々と傷つき、悲しみ、嘆き、わめきながらその生を歩いてきた戦後大衆》が蹲っている場所であると捉えたとき、彼らにとっての前夜祭はその《下方に黒々とした戦後大衆の呪いに充ちた静かな無声慟哭を奏でる葬列を視象》することに比重が置かれた。つまり、プログラムの強行は大学当局や実行委を相手にしていなかった。だから、《無頼の徒が役人共にけんかを吹っかけ、急速に黙ってしまった》のだ。そう、読み取れる。

しかしながら、変革団の意図にかかわらず、彼らの行動は二年後の大学闘争を先取りしていたし、イデオロギーやセクトに拘束されない集団的なありかたは全共闘運動につながっていくものであった。変革団企画が強行された大学の一室は机や椅子によって構築されていないバリケード空間の現出であったし、さながら〈解放区〉の混沌を呈していた。大学祭変革団であって大学変革団ではありえなかったけれども、大学闘争が永続的な〈祭〉の熱狂を孕んで展開されていたことを考えるなら、〈 〉大で発生した変革団事件はその孤立した様相のうちに大学闘争における前史的な役割を果たしていたことは疑うまでもない。大学闘争だけではない。変革団企画に中執として舞台に登場してアジェーションを行っていた田宮高麿が三年半後に、「よど号事件」のリーダーとして北朝鮮へ飛び、おそらく変革団企画が行われていた前夜祭のどこかにいたであろう森恒夫が五年半後に、リーダーとして連合赤軍事件を惹き起こすに至った出来事のつながりのなかで、変革団事件を捉え直す必要があるかもしれない。

2006年11月28日記